



# 三本桜

第17号

ふかく考える子    あたたかみのある子    がんばりのきく子  
9月の目標：伝わるあいさつをしよう

## チャレンジ夏休み発表会をきっかけにして

夏休みに実施したチャレンジ夏休みの発表会を各学級で行いました。子どもたちが自分が取り組んだことについて丁寧に説明し、それを聞いた人が質問や感想を述べていました。どのテーマもとても興味深く一生懸命チャレンジした様子が伝わるものでした。

さて、2015年にノーベル物理学賞を受賞した梶田隆章さんは、幼少期から読書が好きで、暗記よりも考える勉強を好み、高校では物理、生物、世界史、日本史などに興味をもち、特に地学が好きでした。また、両親に鉄腕アトムに出てくる「お茶の水博士になりたい」と話したこともあったそうで、それをそのままの伸ばしてくれた両親の教育があつてのノーベル賞かもしれません。ちなみに両親の教育方針は、「ほめて伸ばす」だそうです。

梶田さんは、東京大学大学院に進み、研究に打ち込みますが、「研究でつらいと思ったことはありません。周囲から結果が認められなくて大変そうに見えたかもしれませんが、自分たちが間違っていると思ったことはなかったし、着々とやるだけだと思っていました」と語っています。

梶田さんのように、子どもたちが追究の鬼と化したチャレンジ夏休みをきっかけにして、人生の羅針盤を見つけ出してくれればこんなうれしいことはありません。



【1年生】



【2年生】



【3年生】



【4年生】



【5年生】



【6年生】

## 職業に貴賤はない、しかし、生き方には貴賤がある

「職業に貴賤はない、しかし、生き方には貴賤がある」、これは、『上を向いて歩こう』の作詞者として知られる永六輔さんの著書『職人』に出てくる言葉です。前半は、しばしば言われるところですが、後半の部分は知りませんでした。

「職業」は、それぞれが「貴い」ものです。「職業」は必ずしも自分で選べない場合があります。偶然に「この仕事」に行き逢った、たまたま「この会社」で働くことになったなどということも案外よく聞きます。その偶然を覚悟を決めてやり通す（もちろん、人に迷惑をかけるような仕事、職業は論外ですが）、それが「仕事」でもあります。

一方、「生き方」とは、自分で選べるものです。どのような生き方をするのか、「貴」とするか「賤」とするかは、その人その人に任されています。そんな内容が、「生き方には貴賤がある」という言葉に含まれているように感じます。

明治安田総合研究所が20～60代の男女に対して実施した「働き方に関するアンケート調査」によると、仕事を選ぶうえで重視することは、「収入」が最多で、次いで「仕事内容」、「やりがい」が続きます。

もう少し細かく見ていくと、「やりがい」は、男性では4割以上の回答となっている一方、女性は3割未満にとどまっており、女性は「勤務時間」や「勤務地」など勤務形態をより重視しています。また、20～40代の女性は「子育てや介護等との両立のしやすさ」の回答割合が男性より高く、子育てや介護等のために、やむを得ず勤務時間などを調整している可能性もあります。現実的に目指したい年収は、年収500万円以上を希望した人が全体の約4割で、男女別に見ると、男性は年収1,000万円以上を望むとの回答が約2割で最も多い一方、女性は100万円以上200万円未満が最も多く、男性と女性で実現したい年収に大きな差があります。

人生百年時代と言われ、また、子どもたちは、今存在しない仕事に就かなければならないとも言われます。保護者の皆様、機会を見つけて、子どもたちに職業観、勤労観、人生観などについて話をしてやってください。よろしくお願いいたします。

